

## 配偶者の心血管疾患と本人の認知症の関係が明らかに

### 概要

京都大学大学院医学系研究科の井上浩輔 准教授（社会疫学、白眉センター）と、ボストン大学公衆衛生大学院の古村俊昌 修士課程学生、Maria Glymour 教授（疫学）、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の津川友介 准教授（医療政策学）、Elizabeth Rose Mayeda 准教授（疫学）らの研究グループは、全国健康保険協会（協会けんぽ）の医療レセプトのデータ（約9.3万人）のデータを用いて、配偶者の心血管疾患（CVD）によって本人の認知症リスクが上昇することを明らかにしました。

これまでの研究により、CVDは認知症の発症に繋がる重要なリスク要因であることが報告されていました。一方で、個人のCVDがその家族の認知症のリスクにどの程度影響しているかは明確な検証がされていませんでした。本研究では、全国健康保険協会（協会けんぽ）に加入する世帯主（被保険者）とその被扶養者を対象とし、被扶養者のCVD発症（脳卒中、心不全、心筋梗塞）の有無における世帯主の認知症診断のリスクの変化を比較しました。その結果、被扶養者がCVDを発症した家庭では、そうでない（被扶養者がCVDを発症していない）家庭と比べて、世帯主が認知症の診断を受けるリスクがより高く認められました（PMID: 38607629）。

本研究結果は、配偶者がCVDを発症した際に、そのパートナーの認知症発症に対するモニタリングを提供する重要性を示唆しています。認知症は現在では治療手段が限られているため、早期発見や予防が重要です。患者本人の健康状態のみならず、世帯全体を意識したケアを提供することは、認知症への対策において重要な視点となる可能性があります。このような家族単位での健康に着目した研究は世界的に見ても限られているため、更なる知見の創出と効果的な施策の開発が求められます。

本研究結果は、国際学術誌「*JAMA Neurology*」（オンライン）に、8月27日（火）（日本時間）に公開されました。

※図は最終頁を参照ください。

## 1. 背景

認知症患者の数は2050年には1.5億人を超えると予想されており、その規定因子を明らかにすることは世界的な課題です。過去の研究では、個人レベルでは心血管疾患（CVD）は認知症発症の重要なリスク因子であることは報告されてきました。その一方で、配偶者のCVDがパートナーの認知症発症へ与える影響に関するエビデンスは限られています。そのため本研究では、配偶者のCVD発症とそのパートナーの認知症診断の関連性を明らかにすることを目的としました。

## 2. 研究手法・成果

日本における最大の保険者である全国健康保険協会のデータを用いて、93,396組の65歳以上の夫婦のペア（平均年齢68.8）を作成しました。2016年度から2021年度における最大6年間の追跡の結果、配偶者（被扶養者）がCVD（脳卒中、心不全、心筋梗塞）を発症した夫婦では、配偶者がCVDを発症していない場合と比較して、世帯主（被保険者）が認知症の新規診断を受けるリスクが32%高いことがわかりました（調整発生率比[95%信頼区間]=1.32 [1.10-1.57]）。この関連は性別や年齢などの属性による違いは認められませんでした。

## 3. 波及効果、今後の予定

患者のCVD発症は、その配偶者に対する認知症の予防・ケアを提供する重要な基点である可能性があります。CVD患者のみならず、その家族に対しても適切なリソースを提供することは限られた医療資源を効果的に活用することに繋がるかもしれません。しかしながら、このような家族単位での健康に着目した研究は世界的に見ても限られているため、更なる知見の創出と効果的な施策の開発が求められます。

## 4. 研究プロジェクトについて

本研究は全国健康保険協会の「外部有識者を活用した委託研究事業」、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）による戦略的創造研究推進事業「さきがけ」の協力を得て行われました。

### <用語解説>

**心血管疾患(CVD)**: 心臓や血管の機能異常によって引き起こされる病気の総称であり、心筋梗塞や脳梗塞などの病気が含まれる。CVD, cardiovascular disease.

### <研究者のコメント>

本研究は古村（筆頭著者）が社会疫学を学ぶ中で、多くの研究が個人のみを対象としており、家族や世帯全体に着目した研究が少ないことに気付いた所から始まりました。現在、認知症は治療手段が限られており、早期発見や効果的な予防施策を講じることが重要とされています。そのため、家族全体に着目した形で認知症のリスク要因を検討することは、認知症への効果的なケアの提供を検討する上で重要な視点である可能性があります。世帯全体を対象とした研究は世界的に見ても限られているため、より効果的な施策の開発に繋がる知見の創出に注力していきたいと思えます。

## <論文タイトルと著者>

タイトル : Association of Cardiovascular Events with Spouse's Subsequent Dementia (配偶者の CVD 発症後とその後の認知症の関連)

著者 : Toshiaki Komura<sup>1</sup>, Yusuke Tsugawa<sup>2,3</sup>, Elizabeth Rose Mayeda<sup>4</sup>, M Maria Glymour<sup>1</sup>, Kosuke Inoue<sup>5,6</sup>

1.Department of Epidemiology, School of Public Health, Boston University, Boston, MA, USA

2.Division of General Internal Medicine and Health Services Research, David Geffen School of Medicine at UCLA, Los Angeles, CA

3.Department of Health Policy and Management, UCLA Fielding School of Public Health, Los Angeles, CA

4.Department of Epidemiology, UCLA Fielding School of Public Health, Los Angeles, California, USA

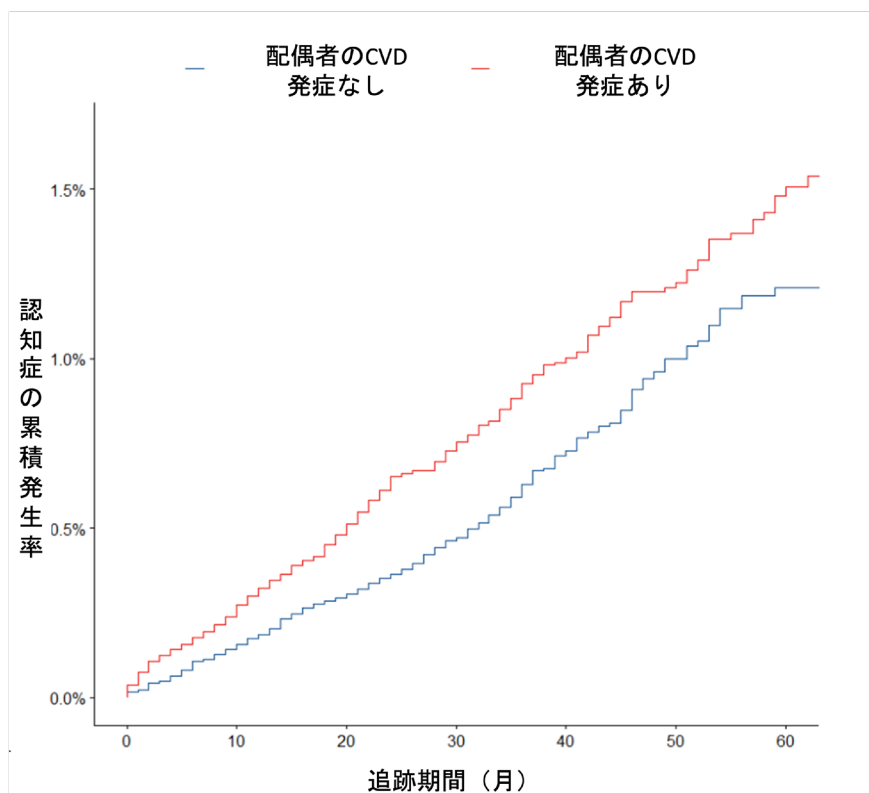
5.Department of Social Epidemiology, Graduate School of Medicine, Kyoto University, Kyoto, Japan

6.Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University, Japan

責任著者 : 井上浩輔

掲載誌 : *JAMA Neurology* DOI : 10.1001/jamaneurol.2024.2612

## <参考図表>



最大6年間の追跡の結果、配偶者がCVDを発症しなかった世帯に比べて、配偶者がCVDを発症した世帯では、世帯主が認知症の診断を受けるリスクが32%高かった。